

2024年5月15日・17日 水曜祈り会・金曜集会

吉田真司

本日の学び：「最も大きな賜物」 テキスト：第一コリント12章31-13章13節

【理解の手がかりとして】

パウロは言う。「わたしはあなたがたに最高の道を教えます」（12:31b）と。「最高」とは、最も価値ある、それ以上のものはないこと。「道」とは、私たちの生き方。つまり「最も価値ある生き方」についてパウロは教える。

13章の初めからパウロは、「愛がなければ」という言葉を何度も使う。どんなに良いものを手に入れたり、そして行っていたとしても、そこに「愛がなければ」それらのものは「無に等しい」と。

コリントの教会内部の具体的な問題を念頭にパウロは言っている。コリント信徒らは、とても様々な賜物を持っていた。異言の賜物、預言の賜物、秀でた知識、熱心な信仰・・・これらが彼らの誇りであった。そこでパウロは、その彼らの誇りをはるかに凌駕する次なる表現を使う。「天使たちの異言」「あらゆる神秘とあらゆる知識」「山を動かすほどの完全な信仰」（13:1-2）と。これは賜物に関する最上級の表現である。たとえこれらの最上級の賜物を手にしていたとしても、しかし、そこに「愛がなければ」それらのものは「無に等しい」のであると。

更に、たとえ「全財産を貧しい人々のために使い尽くす（慈善）」としても、あるいは「誇ろうとしてわが身を死に引き渡す（殉教）」としても、「愛がなければ」、すなわち、その行動が他者に対する無私の思いから出たものでなければ、それらのものは「何の益もない」と。

重ねて言うが、コリントの教会の人々には著しく愛が欠けていた現実があった。それぞれが自分の賜物を誇り、他人のことはお構いなしに自分の満足を求めて振舞っていた。そんな彼らにパウロは、「愛がなければ」それらのものは「無に等しい」「何の益もない」と厳しく諭しているわけである。

パウロがこの「愛」の教えを書き記す時に、主イエス・キリストのことを心の中心においていたことは確かであろう。パウロはここで「一般的な愛」の定義をなしているのではない。「キリストの愛」の定義である。

そこで、この15個の「愛の定義」（13:4-7）、この「愛」という部分に「キリスト」を置き換えてみる。「キリストは忍耐強い。キリストは情け深い。ねたまない。キリストは自慢せず、高ぶらない。 13:5 キリストは礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。 13:6 キリストは不義を喜ばず、真実を喜ぶ。 13:7 キリストはすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」となる。

エフェソの信徒への手紙にはこうもある。「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまりいけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい」（5:1-2）と。わたしたちが目指す「愛」のモデルは、常にこのキリストの愛にある。私たちはそのモデルに倣い、そう生きるように招かれている。「キリストの愛」とははなはだ高い目標である。しかしだからこそ「最高の道」なのである。最も価値ある生き方なのである。

価値あるものと言えは、宝石の王様とも言えるダイヤモンドのことを思う。しかし初めからダイヤモンドは光っているわけではない。その工程は原石を細かく削り削って、光り輝く完成形に近づいて行く。ダイヤモンドは何よりも固い物質であり、それをどうやって削るかという、同じダイヤモンドの粉を使って削るそうである。そうして少しずつ少しずつ、削っていき、そしてあの完成形に整えていく。その完成形のダイヤモンドの形を「エクセレント

カット」と言うそうだ。このエクセレントは今日の御言葉の「最高の道 (the most excellent way)」と同じ言葉である。この世にあるものは全てが「完成形」ではないのであろう。それは私たち人間の「愛」についてもそう。しかし、私たちのそれぞれの「愛」のかけらによって、本当の完成形を目指して切磋琢磨しているのではないだろうか。

「幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた」(13:11)とあるように、私たちは幼子から大人になり、その自我・わがままに溢れた幼少期から、自制心を持つ大人へと成長する。そのように、私たちの「愛」も、最初は自己愛だったものから、次第に隣人愛へと高められていくのである。いや、そうあるべきなのだ。

「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる」(13:12)。いわば、私たちの人生は「不完全」な中にある。しかしやがて来る時、それは私たち一人一人の人生を終えて、そのもっと先の終末において、再臨のキリストをお迎えする時に完成するものなのではないだろうか。その完成を目指して、私たちはパウロの説く「最高の道 (the most excellent way)」を歩いて行く。

その時に、私たちは常に携えておかねばならないものがある。その一つは「信仰」、二つ目は「希望」。しかし、それと共に忘れてはならない最も大いなるものがある。それが「(キリストに倣う)愛」なのである。

私たちは愛することに限界を常々感じる。しかしその愛しえない自分にあぐらをかかず、その自分の不完全さに心を痛め、その後悔と共に、それを乗り越えていくものでありたい。

「求めなさい」(マタイ7:7)との命じは、信仰と希望、そして祈りの中で、「キリストの愛」に形作られる自分自身の生き方を求める事ではないだろうか。

『聖書教育』より

- 「聖霊が降り、教会が誕生しました。その教会は、最後の時まで、愛に励まされ、愛を担って歩みます。」(聖書の学び～最も大きな賜物・愛) —— 「愛を担って」とある。愛は担うもの、という指摘は大変新鮮である。

【報告・祈りの課題】

1. 世界平和、一日も早い戦争状況の終息、停戦、終戦のために。～愛による世界の変革を祈る。
2. 空調システム更新工事のために(実行中)。教会墓園拡張計画の祝福のために。
3. 全国牧師配偶者会(5/16-18、別府)の祝福のために
4. 5/19(主)ペンテコステ CS、主日礼拝(相模原(宣教:斎藤協力牧師)・会堂(宣教:吉田牧師))、部会、部長会・役員会
5. 第78回定期総会(5/26)のために～第二次中長期計画を覚えて
6. 6/9教会バザーの準備のために
7. 座間伝道所の歩み、内藤牧師の健康のために～宣教支援予定:6/2竹内正幸さん、6/9斎藤協力牧師、6/16江原主事
8. その他(個々人の祈りの課題)